

宇都宮正朗先生の「研究レポート」をめぐって

和田 稔

まずはじめに、『リーディングパワー』の監修者として、このようにまとまった研究レポートを読む機会を与えられたことを感謝したい。『リーディングパワー』新版の「はしがき」に書いたように、私は「活用された方々(先生方、生徒達)からの率直なフィードバックが寄せられることを期待している」からである。私は『リーディングパワー』のような教材は実際に活用した人たちと作成者との「相互作用」(interaction)を通してよいものができ上がると信じている。これからも多くのフィードバックを期待している。

宇都宮氏は初版と新版を比較・検討したり、各レッスンについて詳細なコメントを寄せているがそれらは『リーディングパワー』をさらによいものにする際に活用させていただくことにして、本稿では高等学校の「読解」指導をめぐる課題について述べたい。

私は新版の「はしがき」で「伝統的な『文法訳読』式の読解指導も依然として根強い。学問の分野からの知見と実際の指導の乖離が存在するのである。この乖離は学問研究の成果と実践を橋渡しする教材が不足していることが原因のひとつである」と書いたが、これに対して宇都宮氏は「研究と実践の橋渡しができない理由が教材の不足以外の部分で見つかるのであればそれは一体何なのであろう？」と疑問を投げかけている。これは極めて重要な問題提起である。氏は問題を提起するが、答えは出していない。氏がこの課題をテーマに据えて今後研究を進めていくことを期待しつつ、私見を仮説として提起したい。

1 「文法訳読」式の読解指導で生徒がどのような読解力(英語力)を習得するのか検証が十分でない。た

とえば、「文法訳読」を積極的に支持した学者に渡部昇一がいるが、氏の主張はその後検証されていない。

2 「読解能力」とはどのような下位能力から構成されているか検証が十分でない。たとえば、高等学校段階で読む英語の文章(L2)を読解する能力は日本語の文章(L1)を読解する能力と重なるところが多いと思われる。L1とL2の「読解能力」の構成要素の検討が行われてよい。

3 いわゆる「コミュニケーション能力」と読解能力との関係について教師に「思い込み」(assumption)があるということはないであろうか。その結果両者はまったく相入れない能力であると思いついてしまっているのではないかと。

4 「読解能力」の評価の実践研究が行われていない。私見によれば、大学入試の読解問題はかなりよくなっているが、高等学校現場の読解問題が依然として変わらないということはないであろうか。評価の観点から読解を検討する努力が強く求められるべきである。今、「絶対評価」が導入されるのを機会にテストの研究が一層進められなければならない。

(『リーディングパワー[基本編][発展編]』監修者、
明海大学教授)